

海外研修ファイル

いつも「波待ち」

—不確実性の時代を生きる客家華僑—

小林 宏至

(こばやし ひろし)

人文学部准教授

わたしの専門分野は社会/文化人類学であるが、近年、同じ分野で話題となった書籍がある。それは小川さやか著『チョンキンマンションのボスは知っている——アングラ経済の人類学』（春秋社、2019）という本で、同書は「第51回大宅壮一ノンフィクション賞」や「第8回河合隼雄学芸賞」を受賞し専門分野を超えて広い読者層に読まれた。

「チョンキンマンション」とは香港にある重慶（チョンキン）ビル帯のことを指し、本の中では香港のアフリカ系移民（特にタンザニアからの移民）が、独自のネットワークを構築しながら、香港というアジア経済の中心で、たくましく生きる様が描かれている。このようなアフリカから中国への流れは21世紀以降加速しており、彼らはスマホを駆使しながら中国とアフリカの間で、多様な「商品」を行き来させながらマイクロビジネスを展開している。

こうしたアフリカから中国への流れがあれば、当然、中国からアフリカへの流れもある。わたしは長年、中国の福建省に居住する客家という人々を主たる調査対象とし、寄り添ってきたが、近年、彼らの一部はアフリカに渡り始めている。ある人物（Aさん）のライフコースからその一端を見てみよう。

Aさんは中国で高校を卒業してから仕事を転々としてきた。ある時は広東の化粧品工場でライン工として働き、ある時は観光地の民宿の料理人をやり、またある時は厦門で保険の営業をしていた。（日本社会にい

る）わたしたちから見れば、こうした彼の様子は「不安定」に映るかもしれない。しかし、ある意味で彼の生活は実に「安定」しているのである。なぜならば、状況に応じて簡単に次の仕事に転じることができるからである。

彼にとっての「財産・保険」は人的リソースであり、その時々々の社会状況、世界情勢に応じて、信頼できる人づてに仕事を変える。中国の経済成長が鈍化すると、彼は福建の山奥で羊飼いになり、その後中国に見切りをつけ、アフリカ（ガーナ）に渡った。彼は親族や同級生を頼りに、どうにかその時々々の「波」に乗り続けていく。文化人類学の調査は長期間にわたるが、20年近く特定の社会集団を追うことで、彼らにとっての本当の「財」とその時々々の世界の「今」が見えてくる。

さて、アフリカで再会したAさんは、中国から大量に運ばれてくる古着を売りさばく商売をしていた。古着の商売は小売りではなく卸売り。ときどき現地の人に騙されながらも、なんとか商売を続けている。輸入元である中国広東省にある倉庫の商品確認は、同級生のネットワークを駆使して行い、現地の販売網も兄弟の紹介を重視する。面白いことに彼はひとつも英語や現地語を話すことができない。だが、スマホ片手に交渉を続ける。中国にいた時と同様、彼はお茶を飲みながら、相手の微妙な表情を読み取りつつ話を進める…そして、その傍らでわたしは、改めて彼らの「財」と世界の「今」を実感するのである。

